



1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7

物語

○ 感

刺されのひうちかのうふをも又へつてよすてとぬ事
おひそむんとむじておのうよつてへ入るもよ
りうくわく迷つばれてはらかんとも入浦舟よと
てはなぐれそむきとも又へ被のあうやうそむじつうふ
りもくねばれてはらーはよやうんとむりうもてお
めかうくても又ゑのうとあよむまきをしてとく
とゆよりゆも初のふきよがひらくまべー初
のふはーきのうすけりてりふもく
よせの羽がふういつうくふう、よう被ぬくもとへそ
むち、悪そむくそむじるをせきと乱れ初のあかとよひ立
粉くき粉ふちあひひく粉むぞくうらうかくとくも
かくもく

悲嘆

物語

悲れをかはうううれくかはううなまうきようきよ
とくのうへたうこみのうへとくうく涙とくとく

と不言亦ハヨリモリヤークルバモラテヨリシム又ハル
リテトモ人のう事アヒトナ、モトモヨリテ
シテスノリトモアリトモトモアリトモトモアリ
シテハ一ツモアリトモトモアリトモトモアリ
モアリトモセハ一定儀モんモドトモトモトモ
不言也トといふも同一

初言集

从善

初はもとより、おもくらなりとぞすよ
のひとうよどりて今ひとときとひきうし初
のん給すじべー初進の初よりひかりうか言ふそ
ひともひとひそめし
初はひそむかせうちゆかりとあわせ
うれどもびきうれとつみよあくれうちん之神乃
御乃ゆれそりてはあくれゆふ又ハキヨヒギイズ
モウツモいきうてあくれゆふもともくづトスセ
よあづれてくまくねアリとなけくとくとくうり
もくでれゑハト寛通のあづれうるゐの、よあ
きんひとうよどひとひ取れてせふよんとち

卷之三

聞

史記

りやくもととぞぐくも
かきあらがんをひる 神の御事
ハカマアヤラ
ハづてよきて まきこみぬあのいしとハ内へのま
よすとものくわゆのとよもさうともちよのくわゆの
アホもとくすくすく羽ととまさんべづて まくまく人
のそなづくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
まのほのうとよをあほ人のうとくらよとくとく
神とくしめ舟のほのよとくとくとくとくとくとく
和くうち體とくとくとくとくとくとくとくとくとく
れゑとひのやんとくとくとくとくとくとくとくとく
ハ初詣とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
いのうをまね祭衣とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

卷之三

舟と波よもやれてまき川をといひ又まき川とす
まくらて波の匂よそてようやうまよごくら波の匂
むと波のよまくへかどてれんとりせつまち
もあり 泊宿浦山安船川宿まうりぬゆざとま
クタセ多す、りりのあなはまき、神よれとさくら
泊魚ハ我らア人のあまうと契郵うねよも音とあ
なまんとわらえ又そのひきれやくとどんのあうり
とあやうんまもじくら悪よハ三傷ひひやりとのき
じきとまひたのとく三傷ともし因縁いむくろ和
のくわせあらり男よかくまくらて登へてうらを
うらとくれハ女男乃くらちとくらまくねすとくら
れ、男のくまく我くらちとハからかくれたうと女を
くらまくくとむせくとくらまくばそのくだけの
内よきしん松あくとくとひてくらぬあくとまれば
いきくらなめりめり整てあくもひく共と又男をそ

名之憲

やまとは必ずあらえまへり一興りてめぐらぬ次の日
の夜もじかよひてとよもよまともうよゑもしそ
ひてこそどひねりとよもうづくしてひかくくつらをとよ
ゆきわば因みうりやうんよ多用うり初どア
やどふく室主とのふや松の門へどのくしへき
御のいりともよもくうそふのいりとも後り
朝うきあとれながむとお

立無名集

無名と云ふ人と書て、筆を落す。筆を落す。筆を落す。
あめのうりとおひぬへはうきをのうりとよはわら。次
へもうてくうびうとされとすよじ時にはくや、
やまくおうとへうりかとえぢりひともうう
初なまくおうとじまかゆまうか
あめゆうとハ人よくやまんの程とこのあつゆ
そよぎの朝に夢くみす

人倫志

人傳之者又云又曰今人主之賢也又曰今人

のとと人何よのと支ふづれとむあり
解つて人づて

久東

きもく年月からむと多くうらねの季乃年
とてきくゑつまむとく又ハナの祐移すとく
あもしろ強むかとあよびたともうあり
初の神移ふとくらゑねがしれゑきり
年とて、或えくうれ

行年寒
不逢恵

行年とて、久東よがれ、うべー
不逢恵ハひろき歌もひいどて立ふと或ハ
きるのあらそくともちりそのうねあらそ
とふひきやくとも逢坂ハ名のじてそやらぬか
ももじと不逢恵よくん余とよもよく余か
ど淡くう事一これハ古今集よ

余和ハなみそひ考のあをきあくは情うかくよ
といふすとくすよもうてううくことひのをとみ

とくんといすとく其がねのうりに達てもうう
うねつれきこと人のよご今ハやあらうて余
も経ねぐればせうて後のせのをと移すひとく
くまで人のれきしあり世よくもじくひわう
とくがくうきてのつゝよみてあら余下れのま
乃きととれやなとも残り

初の事中ひつよとく人余なひくやくの
牛がくのあらぬからぬがくひものとくぬ合られ
なき、心より後の世とこのひあうでの浦かうの夷
國とハ樂物のふくらむあらんと物本とくこすよ
ひよハうかとと人らむうれどくらうのすれか
らひうれバ樂物もとくひやさんとがほつらなまくと
ひの人のきよのじうからうそもかれ我ハおこくうさ
のひとも又いくべう樂物もとくひわれどれうそりと
それじんをとくわざれじとのちとく樂りと

契悉

卷之三

疑惑

長
戀

竹志

らきよあとがまあまでもんうアビと人の作はんうそ
らふかく、網からゆざまえうそりきよ作はく
うきふ事とほんのをとまくうちうづくせがまく
をとれどもれんかくの底とあらばくこうへーき
をともひ又ハ我たまくねんよをやうよをとくふ
をもくあり 网とのあれどよまく年がびく
のひゑとハ人乃りまくと高審よこのひと又候
あき世をまくもあいさまふこのすまくいとも
網とのまくされたこのひゑ

卷之三

稀憲

つゝハ久のうりうさんとをもむかひなどし
羽、ゆめの枕へうらとひ枕とくらうト組ひまわらうら、夜をも
ふのうらうくくぬ、サとくらみよも
されやうれと、ハキテハアレカクレヒ、季節の経年
ぐううと來とふて年月よきともスハセタの年々

君乃き承はやうてうひらんと
初よりまよゆせうのせいをうづりう年乃あく
あれなく、松のうづりう
別志ハ今立まれんとどもへんてふとよじとえ

教乃き跡よりてひらんと
相あれやうやセタの變をよつり年月あらず
あれども松のらううり

別志

後朝志

や、ちとすれ、きよひうち社、社のうづく
後綱とハリヅれてのち乃れも今別とむハ前
別とくらで乃る又ハラマセシノ社ともいも
あそぞうわ社のうづくとくまみ志のひるぎのつ
せもむけの御よ垂拂り又クのゆふされみかひん
ねととれりともくまとすとて食やうとすんとすと
きと筋の心事とひ身をとてはまうともくまぬむ
生とく網くらめとがまのあづれこーへまくねう
もづく筋の本の西郭のこまくらざまくねの裏
自ゆきひておひ乃ゆるふともひい又あごとぐくひう
どすもあくとまえ後いとくらのゆふとも
網くらめとがまのいとくらめのあそふ
じうくとがくゑのひよせうたうさくはなされど社
文ふのせうまうとくに守れるふよびりしとくま
たうく令とより今とくらりをうむといひ今く

拾遺

切 惠

卷之三

思
片

後の世とちやうへひどどよみ
約が志ぬるいは今後の世
自のめひとりよたくとぞと頼よあはてよみ
人ハシハで我ひそりやまと
約がひよおなうを思ふてご、松一てゆふ
ゆとすとひきの人のそれといふてとくべふと
やゝくればゆふも又象がくうととれぐ
乃ひよもとくとくまつくるわざをひらう
ともうう

悔憲

朝方よりひきとおはすとあらわすを
うやしんへひきとてわんぱうぢひく物ゆつよすく
よんとあせりんとくわぬ又年もへいとものせ
りくくまくまくわくもとくわくもとくわくもとく
すれくまくまくわくもとくわくもとくわくもとく
えくまくまくわくもとくわくもとくわくもとく

七心憲

ゆく人へとおもひてあきらめぬ心の底とおもせつ
こも今ハシモ一きなことおきとらゆうりとおもてはまを
いきかえておとらゆうりやうりとおひてはまを
おきかれ 納なづかせんがまよとおちりん
先乃人の我とおもてられまろくおとこうちまれまろ
くまはあどど人のをまよとれそとれがあやうい算
おひわづよタれば今文かまうすてうんざれよ
つともおひびくともひひあととらびうじやも
くまれぬはまくわくまきせのむとくまくわく
まくせがれば又まうらむひつるともあくえ
バ世中乃まくわくまきとくにてれまやせすとも
ひ又おもてめりあくまてまきじとおじぐれや
もとうとくえ人のらまひくれどもうくおれされへま
りうひあめまとて人乃りまうあやとまくまくと
お人をまよとれそとれがあやうい算

旅惠

アラカミハ家もあくまでもアレと云ふ事で
娘をみのめんがアリテ、ヨリ水エアレタキ
コトシれ興

中ノムツルニテモアラテ中ノ屋敷ナリとアリハの辰
ハ松ガラスナリトアリハナラセナリナ松ニ
西郭ハアラスミトアリトモアラヒト松生モヘラハ
アラシ通路トナラスル所モアリ松モアセテヘ中路
アラシ通路トナラスル所モアラスドリアリ又松無
ヨハラズミのくら乃素モアリトアラリ古モアラモ
一役行モアラシムナリ金率シマラシムモアリ
ヨクさんとアラシム一言ミの林ナリテアラシ
ヒヒ林ナラシムナリタレバヒラハ形トハラシモア
く様とアラシムトタレバ行まいアラシム林ナリ
アラシムハ松ニシテモアラシモアセテヤミナラモ
中路ナリムナリモアリ

朝中路ナリ

寢戀

志ハ一、おも一、体ハ一、筋ハ一、筋ぬる、
寢ハ人の心がうらぐ或ハの心がまづうらぐよと
ハ身内も榮めうらういやしもよなうへひ
のわびのあせのきよとくもう又多喜よまね
よとじハシアリ、うちのくよあうきの男女アリト
ちもうううアリテ我ヰハウツモリキアラシモア
一げねぬはのくと人汗やこう然ハラウツモト
シモアリげを孤うらまの松山波アリシテ
ミ、朝もうううまく、うつうみの松山波アリ
個の心よハ初サ後あう初の心とハ人と共モテアラ
くの心の紫とつらととつともうキヒヌと松山波
中の心よハ初サ後あう初の心とハ人と共モテアラ
くの心の紫とつらととつともうキヒヌと松山波
心の心の紫とつらととつともうキヒヌと松山波

寢戀

そのうちじまのひるべりてうのゆりのあれば
うそよせのゆめの人の仕事のあらどつがう
ひるみあらこれはおとす集は

ほどのとじまへあくたくよまくとの人の云
いやあ、うるまのまことじてうそよせのせきる所
奇ヌースうそよせ浦よせ後すもあらさ
衣のうそよせもありよ

かくの紫、黒のあらぐがううう浦は浦れ
かくあくま久ゑのひともとくえひうきく人の
中経てゑーくからむとまれどあらひとも後す
波寄あり

羽ば年月年すういひづのと金をハ考ぐろ
金のいのちより金を金よりそんと金さんと

羽金より金よびよばう金
の愛の中よかふんまちよとミヌ公友のすよあらぬ別

恋金

老窓

となくさく又ハ金がうのひまときうてがうくくも
好う夏かふとく夏のうれぢ

老人のゑとくらへ秋の老ひそよくもとハ
ちうすきとくらへどやきよあられなむ又ハ
いひ老人の取引とまくとくとくばと老のと
なだく又ハ老のとくらへりくねくのねま
きバ秋の老とくらへばくん金ハ老のねうなよ
ーとむくひく

初、たそのり、秋よみけなるとつりくととの金
切、兵と半と年がそれきととひそちかひくんれ
未、我地よびどんとくとくとくとくとくとくとく
ひくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
未、かみでのト等、在東中おつてゐりよとすとく
べととよとよとくとくとくとく

組づきよかうとくとくとくとくとくとくとく

恋夢

恋

卷

卷之三

「かづきとうよひとくろなうむづきわらえちの
あとへはくもくづきのねなどようり
ねづきやうがとうをひどびや
きのんとくよハ或ハモリのくよ
あるんとくのくのくわくらんとく
とうり
ねづきのくのくとくわく、まおのよそ、くづ

近
稿

旅宿

卷之三

近ふの人に多くて近きをかへずはとすひ或は
易く、かよわう人とも多くてむづしき、
相殺れをや、かがやくする。種の中日が
有りと乃妹もひときむとわたくし娘有よてまく人
とこうちんともよき
幻覺ひきがうとの妹也ふくび衣うそと、ぐうなのは枕
ゆふ人の五郎の三みえよくび歌も初申後のをべて

かくのまゝのよきれり
志之介ひとい歌よりもぐの歌ちうとつとも
ともぞれば略之づれの歌む其歌のよきじゆく
くやしきよその歌をもてよじづく

山
教

卷

細川春翁はあよみとを歌ふ處是谷など後ハ無事加
多々是谷などある歌ふと後ハうなづくともいふよ
とがれば山は想ひてへろき歌かればまゆの處毛上
谷毛かと後てくまゝど歌はる谷などハ一よとハ
きくち歌かればゆといろく後てハふけとくもとて
いとく憲ともぐうざざくら歌よ初憲憲憲は憲させ
ゑいづれとよもても多子細憲憲竹憲竹すらまハ
ひらくトキまえぬよおれど多竹とりよハ山のむねあ
かりとハ山のむねれくら尾乃くらふのまよぬくし
かまどりよハ終とあうえハ歌をくじくどこの尾上

の様はよろしくやまひ處ともどもあらなんと書了
ハちふのかよひきものありとつて枕のゆとへぬや
りうきくふのゆとへゆととのむちへるるやう
そがひともひよ左ほとくそくらハよりぬる谷と
りそくらハ水ある谷とくじべーとなん樵宿とへゑと
ミ乃うちよ路じふ路の駄よ谷のやえまら夜のう
よひらまぶらかたどりしべー又路といふとくもよ
入皆かね井とよちばおけねとくみみかのやいづと
のねくらきのねすとくみみかのねかとくらで
くらはく夜とくらとくね叶くゆとくよハやま
ぐく又仙人といふすもあく凡ふとくじよハまむ
咲、あれから夜の白雲と花よすぐへ夜爲めぐりむかのと
ときとがく秋乃あゆくちをまがふよきとくもく
ひくをもよ夜乃本紫も凡よそれくらまく

のまゝあたゞ日さすまゝ水屋乃山のハ因めよも
つりりとてり、富人へいとくの役といひうつ
の丸木乃石も終へやうげどもぐく又及びなき
人としてハ不二の称なりとようせんをひ廢山よ
りせて、ようれき、悪となりとびきりと
うどをたまへ代のくらよたまくわざわづか
ううむよもじよせてゆ
とくみうれ

約ありのふとくどきのあらむひかけ移
をとゆるもかなふとくづま木うちせうづ
さくらんあかくわてぬまの経どりかく松ひづ
松村づれまくらくうじくまき

実政といふ者、ひのむかとすものあれど、張人のひの
ぬきぬ又はあいの心あらざりとし、実政のみがうた
と奥義がよせば、さうしては、徳のうちりとも上庭をよみゆ

卷之三

よと付てそのまゝうしてまづあへてこのまゝと今後
とゞりとくにひたゆつやううとよじばいもれや
きのそねとハむくをさみ壇君といひ人森王
よとれ、御よきれてのど、め國名とよまよ
とくりぬけ寛熟のかくねうびうへんととさじとふる
よ子壇君をう三千の客の中よ鶴のまなまくともお
あくこれづみ、きのほよ様ととさればよとのをちも
やううのあくまくまのとと仰てととくうりえう
きのう称とらすとまよふもくまのたまくと
はせかまくうてまのとわくとひまやまくを
わほのまハあれよひとめよまやうんとよと又ま
不まよとせてももじく松の木をまのまのまとま
清めぐとおほのとをく不破のまハあれまくまやの
いさげともばくみなりまくとよし野鹿のまハ
致とりまつまくとくの野ようとくをまよ

野

あやしくもぞくよもう日向の處、日暮とてりんじま
モ 紙、あらざごつとひふとざーをのくね
野徑とりよ歌ハ其の邊にひりときかす、學びの
神とよひづー野外ハ此とよちばれづこの字か
一又歌とりよ歌よハ東と西てもくづくとふと歌
よ様東松ゑたと木のゑ、わ、あくらうゑ萩の枝
ゑかゑゑあのづくとハよひづー甚亦ひづのゑ
ゑきくゑとうきがゑがどハ勿縫く時ハ空季よより
てとく続うづづーく行くもくはま及時さ
とくハ歌とよりりんてせちのうまとハ歌よめう水こ
まもあう野亭とりよハ歌の鳥丸尾後、八雲流丸尾後、
くせハ清流れよ名はばよひづれどかくぐあくから
ゆよよせくらきと源氏よかくくづくわく、あれと云
神ゑお名はのせはえあう日向よあらざととのゑのや
かどひづきハ歌ハ歌ハ歌とよとむ後

水色

支せとひきりとひとまく又くとせとりのハモセシ
名海よもあうやや射とハモとせん萬よ射と射て
うせの射ハ是の事めようせ又名海なうが名はよつさ
ううとせあうぐーううて略之

19

水色とくすは川は波波に井泉滌づれかともぐー又
みづうとむらじきし海を後くとくーあきへて季
内中よそぞくづれむひそび歌く水色とひうりで
うう歌ハナトされば地よりうき私きうひうごー
川ととりぞくる歌に水川のとのととすすでむくすう
う波家かとむらじきー川色とくす歌むわくすう乃
ふとよすすむとく川とくすああう又川よ舟とよ
ひと代のうとくすまはいとく滌川とハあひのあくと
なきう居るどくよハ雲はね滌とくすうり薦する水筋
ちよ人よまきれう坐やとあなととむせうそうてよ
じべーとお世とまうハと清てうじ川ハ滌と川とよ

波

えとくさうハとゆう附ハ水ゑく薦する川と山川とくす
もとよがむ形、水のとがどとみの一西ようううう
てなげれどあくきほとくよ水尾やりよハあひのり
き西よくまなハとハあひのあハと川戸とハ川口と宗
例ハのちる例くあのをくうとハは水とりよど
とあくとくうくと
初あさせ御、まくく波、まく舟、だまくハ豊原、まくけ
く行波が水

古波とくよ歌ユハ古の字をくてもゆうとておけと
波の舟ヨクーううううとむらじき海の波り何
のヨクうううれどむらじき角田川ハむらじき波
舟ヨクーと波のヨクうううとくーと大井川ハうう
ううとくうううの波ハ海ヨクー やびせの波ハ海水
の波うし又なみかくうとくううハ波みハちうにあ
とのふくううせとりハ波うし波う川とハ冥途

橋

そりとそりとまほの様ハ今ハナタクレどもよし
せうとく天のくわくとハナクとの様よハナクれを様
の歌よトトロ歌もあり
初ハニモハシハナクレハナク

13

てわざわざでひきあらぬなまへよし。一章之序久
以ハ角扱とく。一海路とらずて多く船路といひ舟のう
てゆひんともいふ。旅泊ハ宿の旅也。うも称候まづ
慣れ候は候乍らと達。御めよも候べ。

湖

山家

の歌よハ近いの海水の氣きづれともよひざきやう
もやううぬとハ近いの海水の氣きづくよけのくもとも
えど波なみハ是これ又近いのがの氣きづくもか布勢かせのが
との波なみは又波なみの氣きづくもか波勢なみの波なみ

御はよかれ。 ひゆひゆうちひよか
くくのぞくへ

湖の歌よハ近いの湖水の名ふづれとわよじざきや
かうてうぬとハ近いの湖水のちゑくみのくとも
さくはははるを又近いのがのくにまか布勢カセのが
とのが 作はヌ枝ジのう 鮎アマともとむじづー
釣はよかねササシタマリ 一
垂シテるすもよふ表ミラふ鏡カミアトと見
ひ衣ヒコ山霞ヒマツキハ黒クモハなれて秋ヒナあらそ山ヒマツキハ家ヒガあま
あうとひそくくうけりハあれどうれむ黒クモとよううれ
青シオえられハウトヲトてもよしへれど秋ヒナの歌カタよハ築ツク
のんわあくびきや日ヒがよ笑ハスの夕ハシ松マツのとたとうてハ少ヒナと
タくとも家ヒガと云歌カタとりくとまゝ又表ミラの字カタやうへて
しよ西ヒマツキすくらんといひ人のよとハぬ、支ハシまさせよと
多ヒナどとよも家ヒガよけよとんと表ミラのむづハさひと
んと陰ヒヤよよひト 夫ヒトハねかく凡ヒナのちやうて、まほく人
もかく左室ヒツルの夜ハシかして舟ヒツルとまうもかひの水ヒツルと聲ヒツル

乃使と一あらうくひよはや人とせうてのよまとざふと
のえ柳のさうの声よんとづこすりじふれどく又うそをう
うかひとうりはまびくかにとくもくふうきせ乃
又もくさうてかはまどくもくせよくばくとてふ
西乃やいもとづくとくとくふともむう早トのゆうと
よもーく家よれとせはれなとどりよかはまふよ
よぎれととごめくせやぐれハムハムアヤドとゆ
朝人とひぬへりうれふ、さびと松外のき、さかへの水
せよくよく松のえ松のとひのと、若のうとひびが
錫乃雲をかひよ使ち朝と求ひべー

軍の歌よふかのむちとす布中の軍たどわづられ
ど終市中の軍がやまくらぐーとぞ軍のすはなも
さひきんと給よびべー或ハヤムビズヨウトモ
ヨテキタアハガク君のまめらもスルアヒテ
レミドコモシヤシマリモシゲテ人ソジタヒミ

周易

ひといひて害虫とりせんのうト一 田中用庭づれ
もかわ一 あらとくいよも害虫よひと一 又荒屋左砌わ
りてくろ銀もあようう鉢ハ室をよ似へるやうなれ
ど荒屋左砌へぢれくらふと絵よ絵べ一 おぼうきや
ねみがよんもあ一 やすくまき、あまら、ひが、と、松風
園林せよ田家と云畠田の名より、ど_は一 鉢よ田の名
とさればうつ畠て乃爲もよじてきや大
く田家ハ門田とどうう黒帰の畠をとがくらう
畠家のあつこよ書ハくう 苗代よとよとよとよハ
早苗とくち秋ハかかばのえとがくう うり流せなどわよ
一 はうりくへ縁をべ一 狂秋田のゆよもよ一 早
朝よハ秋りとくく一 黒のちれくらとくらくうも
とわよとくくとくくとくくのれをふハ乃
れもぐのれをふとくう時、くらきうゑをとどくヌと
てあれくらやどとくうてあくのゆよううもある

田家

卷之二

べりへりあれもあれど人すとひふじとひしと
珍よもひく旅うきよをさとも秋きくかうり
ととくしてり六かねことのやう。されど旅うき
ハあれまくらむひとどもびての執名別くちやくそ
くち歌うてハ旅のちくよもしよど

水
之
序

朝、室へあれて、庭のうねぎ、庭のほげ、ひぐら、荒、難
、あれ、植林へとひなへようとも黒、かうと
、水々と八川、べの黒とり、八川、この黒とも八川、の村ともむづち

又水の名はとくよりは雲の名をもつてもうまく
うどみきのふと終よくじへゝ名は徒川下の川
宇治川すきのゆ桂川もづせ大野川立角川もかせの
志摩の浦駿岐三河にさしかけ田川玉崎川などと後う
ぬ亦す古内記案(案)云水の詠海倩案之不可能(略)
志摩よ詠海倩不可能斗_二去後も御院より定義へ
上林下ノ以不_一能_二よ今之をよハ不可能_一と

卷之三

りう猿鳴とハ雅はなとと通じといふ
細ハ門のひよ求むトテ教名ひよ多シヒア
空とぞ

細ハ門のひよ求むト一物乞ひに至りシテ多めかとトナセ
ハモジニ

釋教

ハラミニトサハヤシト四ツヒナヒト
社おうじと、あまくみつひの交、あふるど、さす
侍の、みのう、法の交、あまくしり、からく、れ井、法の神
カクニテ松の氣、いきの声、アモナムセ、カミヨヌ
、うきよのや。

社ス高の音ハモウのそのミーク歲のミムシの、そ
レの聲の、ひりき、シキ、ユウ三十字の、なまよこを
要文、ほほき、とめりて、おもりの、なれハ、とめりて、
づくもあ、とく、なまか、とく、くらん、スハタの、みよ絃
わ無事と、秋一あうきの、まよ枕と、そく、モハラキ
の、爰、さうらんと、とく、ひかの、えと、なまく、て、茶
の、毛の、ひくと、ねぐ、ひ法の、水と、結、ひて、ハルの、らう
と、とく、とく、とく、ひ法の、灯を、うき、ハルの、まく、う
じと、と種、ひらうと、紫乃、ミムシ、と、ハラミニト、
世の渴

よそよそリト、と、おひ秋の、おは、あうひと、ひの、
おは、おは、うら、と、うら、と、おは、
朝の、うみの、うれむ、の、の、灯の、お声、の、うれむ、の、
己の、舟法の、舟、ハ、の、底、お、の、そ、法の、う、も、ご、件
ごの、ひ、件、が、の、え、笑、の、ひ、も、の、お、の、きー
を、お、不、可、勝、斗

社スユスヤー、ろ、の、ふ、よ、ま、て、ハ、お、せ、幽、秋、す、去、社ス
と、神祇と、同、事、ナ、れ、と、も、か、く、と、く、一、を、る、神祇
下、あ、ぐ、う、の、神、日、と、ち、た、と、も、の、神、氣、よ、う、じ、一、社
ス、ユ、ハ、後、ぐ、一、と、も、い、く、と、な、れ、バ、神、ス、ハ、神、と、く、ぞ
も、く、神、よ、う、く、る、る、と、う、じ、て、も、也、神、ア、く、う、社
ス、と、よ、ひ、も、寺、神、社、ス、ユ、ハ、神、と、ハ、う、う、も、ア、神、社
の、も、と、よ、ひ、も、社、ハ、お、き、く、う、う、と、ひ、う、う、も、神
う、う、う、も、だ、な、と、う、バ、お、け、こ、う、て、又、社、の、お、な、れ、と、も
契、成、ま、自、石、清、水、袋、を、た、ど、名、と、」て、い、び、く、う

うすきづて乃公ハ秋モアラシム事とあひてスハ
御書のうふともやさらうふらひてばれぬのる
朝ちやかにゆくとおき自ゆうり秋風もがく
おちのむくびるまぐらはいじぐくがさらまそ
いむろもせり穴をひくとくもや人食ひ
やとみかぢくはりりいのからひ

遂辭て去述懐へとひのまことりをかみは
ひくはうべー述懐のあともああくまじひきよまくま
のこちくくど或ハトよとくれ或ハミヒトよ愁あく
乃述懐など各別しきれまちまうならハまうし後
成て述懐而もあたはまわせむ何況身もまうてうき
ゆたまきよ心泊ひまくらを寧からまかハ不てかく又
八雲山がまく述懐とどき程よかすりつびこのまく
まくともくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
様とりくがきのまくまくまくまくまくまくまくまく

とくにうる行はゆれへくぬ御事シテのつてく
くす風邪ウツカニとひふよもどりゆくうき經よりへとく
ぬぐまし又連像リョウジヤウハ後乃我來のるよつきての連像
もとひよしトモヒヨシはう齒缺ハラガタキナカされよつきて又やくえきともう
とくにハす衆人の打うちせてかまひ連像リョウジヤウにどもく
すあらゆりアラユリせよもんもんもゆくもれづらきまれ
くでひよむすよこだあゑひのすよ
かつめあられとまきや參サムライまゆゆ候マタタクきくのうのうせ
くのうのうもくわちくぬ人乃道の連像リョウジヤウハとこぐれ
ミムラシキシテナシ人皆ミムラシキよやうりていじゆわちくミムラシキ
朝アサヒがきせうきとづきせかうくざアサヒがきふ、
かくとみようてとのくうぐ
儀用イヨウハあくまきあんがんば我世ガクセのひヒ
くじ人のうとせよとわうじと又ハミナセのひ
のうとわうじのくやくようぐ

懷因

衰傷

うせの羽毛のひづりとまづる者を死ねばひとせ
西教もひづりあづのとどまつ
事あわせりくに無事よハ世のたゞめるとひづく
もひひえさくちうてせんとなくともよじを衰傷
ハヤもんとじりしてなづくを愚鷄覺注哀傷
のうへう殺せゆれりんと企くがどもやくをすハシミ
うりんすくわとかもくとく又毒霧けよよぬきのと
とのえかどハ咲くをえともうくもあくべ一跡文追
善かとひのうハ治と経きくをもやくべと経と経と
て千せ万代やとくつよまひてよあくと衰傷の
ゆよかとれく経の有やよよひと人の汗かくとく
よみてとくらひくよがくゆくがく文又ふくふくとく
鶴行無事と歎一と志のあくとのひづくとれせ
まつといまわら水の波と金玉とくらまうき

旅

のを、猿はハ猿となりてゐる所も恐乃内もあ
乃の所に在りたまぬ所全か猿へ羈中より近きにひふ
名はゆまといふ。伊人無限の類、ちうどくの處なれば
をききる所すらう。紹はハ久からく、恐れてし日も多き
矣。翁のいふとじよもんじよ

一旅するはとひと海道どらのをよみなれどる久
ぬとトシベトをよむとハ伏吏御室を遷設せとのハ
御宿のものよりくとしやと門をくまふ門の前と
肩かのすひまきのゆかふもあひだりきそらくらのとケ
今とハ移りあれのじりふかよのすひうの
きよしがまかづる家主の林わくね山と済る
おうちふひく時とく内日月のまつ大和路
ちくにせらがよもじくおもじくおもじく
ひくとくひくとくあくびー西四のまつたとく
駿河一驛路とうべしやとすよハたとく

勅使のあふ下句乃時をよしやとつてはどもう
おて勅使とりてかすとしよみのとくといわせの六
トヤウとことこすせんあよびくろこしよみづひ
ひよやくともううり名はハ金坂、むこうが一茶
をもとよりうきとくえ猿のすへ猿衣がよきとく
ひくらあぬ野山とこすあ葉翁よつてよくと
とくひくゆくせぬ夏も良ま乃きよかとこ
朝ち拂、さす拂うちげす拂ひまほの床、かく夜、かく寝
寝ゆふかくとくかくねの寝いくようちねむねむ
がまくいひー、神かくやつく

此をハ社ひあけりとすもかうりの事とをく
トモレヒとんじハ社えよばむたのくら
柔よつて内と社らのひ人のきの字よ夕日うち
人氣もとなづかしやハ望みぬ冠土のち林の木
とゆかくわようるあく雲は雪うれとたうち處

五

万より萬、万代のはづきせすれどもせざれ、ひいて
いくま、いく秋、くるれきよらひ夷とせ、夷らよ、夷万代
ハ百万代、もくともくもくもくもくもくもくもくもく
以外天象地係植物雜物生類若の歌うとくやう
とりどもとをがくればあぐくすうとくやう

名の事

名の事とむよへ捨てひかわとす

一あ知清行日ごひくら朝美下する名の物の美名をみひ
びくと名のふくらむじめ花よへ音せむ葉よへ音田根を
とくとそ等とそとそとれる名のと、名の人のとある
きる耳ととくとるのとし花よへ音せむ葉よへ音田
うそいりやどもうじきん情りべーとじひ初生
も始じてうそとあれば音立田のかはなくとそ
うといすまおうさぶー先音難高とむむ難て又
ヤモムサキクシヌ名の事とすうとすうとす

うぐいしのすもあうねくせはきぬくぬるとぞ
一ハ雲行候と候と名よすをれとふと考へ一姓
もくらすもとてうきんふなみをうんも考へうるす
きしとしきその下よすととくたと歌をとすとよ
付ハみをとく名のふくらむ名の事よりうう
てよじよへとくばうとふじよくひひやくの実
をとくやうのゆふくら名の事とむほーとく
日吉のゆたの雲行事などよハ是今この事と乃
ちくこぬと涼ぞぐれことい秀すなれども歌くび
をとばれ候なまくとそく品今この事と歌くべーと
公のうーしのひくら筆氣とくらみふくらひても
づくとくとくばく參う歌あよなきことひとひえ今くも
まかとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
一月たき歌よ名の事とくとくとくとくとくとくとく

トモテシテハ第ナツトモトミニヒニ
トモリテ名ニシムシテシヨセナリハキク
シトハナハツシモトモシルトガシクハ吉良
シトモトガシテモトモシルトガシクハ吉良

日光さうむよもれさせむ事もあらずせ
じとハタクものむよらみて歎歌せんよれもむすび
ちば事もよきづひて通つゝてへよきこととま
くもあつゝとくとく物てえむ事も留
たゞよる事わづく後かれうながなて今う
かく後とへゆくちよく、うそくこれどそ
乃名やうらうれば共もありた事もあくよく
うそく後奇なくとも今うよをづひてよひじ
とくもてよくよとくもひよりあつゝ

六月の浦佐吉の松のござひと次まをくら
一日大崎の浦よも今ハ松かし佐吉乃松よも

されどもれひへりてこもとらと流び一をう
のへりへりてうちあとむゆうべとありゆう
水無川はあああれども水なりとゆゑどくこ
ありとも今もやづしきよもふきてひりのゆ
うりて一かわひつみてよじづくんよやくよゑ
くしてゆゆき一ゑひつちもへ候若て人のゆ
こそ携集をとふめくとも大波の浦ふ今へ聲
大波のねへくもあゝかようそとのもくふくられ
候言ひ松ふもなまくと
仲山の空よしけ後音ひ松のまうえとあゝぬゑを
まうの音れとひりとうゆくしやくがばとすりすり
はのふひをくればもくと今ハ我とすみえ
水無川よああたこも水かうと海をも

とあせりあつてやせなき社説は家ととなふとかりへ
ひづの改りそつゝもいつてよじくんまで云
うけひづく序と今ハナミことまちれともひづ
のまふよじきもされど又序あらうて本の浦よ
おあーといひ位のねよ浪もあめよーといひて一と
あくとらでくさきながらばやくよきうしてよひーと
一愚向賢注名は事物へ亦雪などとあひづくも有(タ)れ
作例なくともよきうんすくさーとあうびうさうとや其
名ふ云月雪と云處などハひづくもあうわかれともほ
つやくらふと可解のせせ連下されと凡くいふ上
よ後あうやうされた外人をとみか雪を云
處のこぐいづくのひづくの時もあうわかれ能
奇とあうま反対とひづくもあれとうふそ
ううば候あうてとううとくとくとくとくとくと
かハ次ナアトとがまえさしと雪がすとくとくと

の白根山土のねのくぐる雲ハクタマツリのくぐ
ひそきやまのむかでのうすはあ霞が波うち仕あら
やうよろりてよしふーと

同草木の名と一々ハ始てトシテトドモ
夜半か御て自らのモロモロ此の女郎も娘と云ひ
タリの名が云々と云吾ハ彼等と云ひよ及紹房ナシモ
少の吾化ミセテアリトドク承及ムチサマ又ハ生れの
ヒジヒハモアモアヒ又ナシキムカレバトクナシモ
モ母ナシレハアムルナキレトキヨヒツノ名あ
マヒ久空ヨヒ奈也ハれタナリトナシモトアリ川良金
中納ミトハ就役ヒキヨトモモモモモモモモモモ
トキヨトキヨトキヨトキヨトキヨトキヨトキヨトキ
アヒトモモモモモモモモモモモモモモモモモ
の名はモモモモモモモモモモモモモモモモ
乃お無ちハ神モリモモモモモモモモモモモモ

すとあらうことやらせんハ一面其毛毛疵もこうだ
ソドモ疵もと祀りておしまるやうす

一幽霊すと只其毛の毛てハ境地のうら山本ハア
アヒトのまきがりそくぬとちりうら山本よ
詠て他其處の地を祭祀つかハる例あら
さあらの毛と勘ふとれはまくべー御役と、
カリカタマクマ、御役さうのまのタマシナシマラ
ミサチハレとんがく地をひきやうせうつるもす
ヨカルカタマクマひ其處の様うなべーとくらす

トシゲラシトミ

一日スヌ奈からぬあまきて其面と後すけうたくべ物の
名の源始たるべーそれともまくユモナシマラす
それと六句とあるがてトムベーとくべひぐじの庵とよ
まんとくとくあまきとがむらてひぐじ乃庵とまくのす
ナタベーとくとく毛又名前やうぬのそそそその

不とよし清やうし物名の源始とハシトバナ今集の
物名よりやうハ

うなみの源始とくらやうかへ境の新玉されり一考
やうの源始とくらやうかへ境の新玉されり一考
クテ後ベーとハ別吉音法下いくしの御みて
ミのふりと秋くらやうにいじの御モモす御内内を
あらのすくらやー
ちとお名はどもひよハその名のゆゑだなやうむち
ベー或も名はゆ後すけ御玉てあーらひ又ハモ
名よりひつぐる名の御あらへとくらやーせよ
ハシトカタマクマ、トムベーとくとくのゆゑだな
カヌハモとくらやうひあらうとむ功老物のとくら
トムベー

